



交流の灯を絶やさない

—— 日本国際貿易促進協会理事長 泉川友樹氏に聞く ——



2026年3月、日本国際貿易促進協会の新理事長に泉川友樹氏が就任した。中国語との出会いをきっかけに人生の進路を定め、通訳、経済交流、人的交流の最前線で20年以上にわたり日中関係に携わってきた泉川氏。日中関係が厳しい局面を迎える今、新理事長は何を考え、どのような未来を描いているのか。就任直後の思いを聞いた。

■中国語が人生を変えた

Q. まず、理事長就任の率直なお気持ちをお聞かせください。

泉川友樹 (以下、泉川) 身の引き締まる思いです。これまで私は理事兼事務局長として日常業務を統括してきましたが、理事長としては理事会と事務局を統括する立場

になります。責任の重さを改めて感じています。同時に、会員の皆様からいただいた信任に深く感謝しています。

——中国との関わりはどのように始まったのでしょうか。

泉川 大学時代に中国語と出会ったことがすべての始まりです。その面白さに魅了され、「中国語を人生の中心に据えよう」と決意しました。当時は中国語専攻ではありませんでしたが、留学を志し、多くの方々の支えを受けながら学びを深めることができました。

その後、2006年に日本国際貿易促進協会に入職し、日中経済交流の現場で仕事を続けてきました。振り返れば、中国語との出会いが私の人生を大きく変えたと言えると思います。

■通訳から経済交流まで

Q. これまでどのような業務に携わってこられましたか。

泉川 中国国家指導者との会談における通訳をはじめ、農産物、物流、知的財産権など幅広い分野に携わってきました。経済交流の仕事は、一見すると数字や制度が中心のように見えますが、実際には人と人をつなぐ仕事です。

成功も失敗も数多く経験しましたが、その過程で日本と中国の多くの仲間たちと苦楽を共にできたことは、私にとって何にも代えがたい財産です。

■交流は決して途絶えさせてはならない

Q. 現在の日中関係をどのように見えていますか。

泉川 率直に申し上げて、極めて厳しい状況にあると思います。しかし、だからこそ交流の重要性はA増して

いるのではないのでしょうか。

国と国との関係が難しい時期であっても、人と人との交流、経済界同士の対話まで止めてしまえば、相互理解の基盤そのものが失われてしまいます。交流には時に遠回りに見える部分もありますが、長期的には信頼を築くための最も確実な方法だと考えています。

私たちの役割は、そうした交流の灯を絶やさないことにあります。

■若い世代に期待

——今後、特に力を入れたいことはありますか。

泉川 若い世代の交流支援です。

私自身、多くの方々に支えられて中国語を学び、留学し、現在の仕事に至りました。だからこそ次の世代に同じような機会を提供したいと思っています。

近年は日中双方で相手国への理解が十分でないまま議論が行われることも少なくありません。直接交流し、実際に見て、話して、感じる経験は何よりも大切です。未来の日中関係を担う若者たちが互いを理解し、信頼を築いていける環境づくりに力を注ぎたいと考えています。

■作文コンクールが育む未来の架け橋

Q. 日本国際貿易促進協会は、日本僑報社が主催する「中国人の日本語作文コンクール」と「日本人の中国語作文コンクール」を20年以上にわたり後援してこられました。まず長年のご支援に感謝申し上げます。その上で、今後さらに多くの日本の友人や中国の大学生に参加してもらうためには、どのような工夫が必要だとお考えですか。

泉川 こちらこそ、長年にわたり意義ある事業を継続してこられた日本僑報社の皆様に敬意を表したいと思います。両作文コンクールは、言葉を学ぶことを通じて相手国への理解を深め、若い世代の交流を促進する大変重要な取り組みだと考えています。

近年はSNSや動画配信サービスの普及によって、海外の情報に触れる機会は増えました。しかし、その一方で、自ら考え、自らの言葉で相手国への思いを表現する機会はむしろ少なくなっているようにも感じます。作文コンクールの価値は、単なる語学力の競争ではなく、「相手国を理解しようとするプロセス」そのものにあると思います。

より多くの若者に参加してもらうためには、大学や高校との連携をさらに強化するとともに、過去の受賞者の体験談や交流の成果を積極的に発信していくことが重要ではないのでしょうか。また、オンラインを活用した交流会や受賞者ネットワークの構築など、応募後も参加者同士がつながり続けられる仕組みがあれば、より大きな広がりが期待できると思います。

日中関係が難しい時代だからこそ、若い世代が互いを知り、自分の言葉で語り合う場が必要です。両作文コンクールが、未来の日中友好を担う人材を育てる舞台として、さらに発展していくことを心から期待しています。

■歴史を受け継ぎ、新しい時代へ

——最後に読者へのメッセージをお願いします。

泉川 私は1979年生まれで、日中国交正常化や改革開放の時代をリアルタイムで経験した世代ではありません。しかし、その後に築かれてきた日中交流の成果の上に立って今日があります。

先人たちが積み重ねてこられた努力と歴史への敬意を忘れることなく、新しい時代にふさわしい日中経済協力のあり方を模索していきたいと思っています。

悲観も楽観もせず、現実を見据えながら、一步一步着実に前へ進んでいく。その姿勢を大切にしながら、関係者の皆様とともに日中交流の発展に尽力してまいります。今後ともご支援、ご指導をよろしくお願いいたします。





中友会会員による
中国滞在体験談

私の中国物語

「私の中国物語」その①

人生を変えた日中交流を体験して

高校教諭 喜多 住香



近畿青年洋上大学に参加し、大連の歴史を学びに行ったときの一枚。同じ班の仲間たちとお揃いのTシャツで、今までのことやこれからのことを考えた

初めて中国を訪れたのは、大学1年生の冬。

外国語大学の友人たちと、習いたての中国語がどこまで通用するかを試そうと、学生のみが参加できる格安ツアーに参加した。看板を読むのも、数文字しか読めず、ピンインが曖昧で、なかなか通じないもどかしさ。中国の方の方が日本語慣れしており、ぺらぺらの日本語を話されてしまうことが、なんとも歯がゆかった。友人たちと、しっかり勉強して話せるようになろうねと約束したことが懐かしい。奈良県民の私は、シルクロードで繋がっている西安に行くのがとても楽しみだった。現地では、公安官の男性2人が、快く観光案内をしてくれ、住所交換もした。帰国後、その方から手紙をもらった。辞書を調べながら必死に読んだ。「君は西湖のように美しかっ

た。いつか日本に行ったときには、日本を案内してほしい。」と書かれたその手紙は、30年近く経った今も大切に残してある。返事も返さず、手紙もその一通きりだったし、再会は実現しないままではあるが、当時の思い出は青春時代の良き思い出として、今でも鮮明に思い出せる。極寒の寝台列車、桂林の水墨画の世界、世界遺産の兵馬俑の迫力、万里の長城が凍っていて転んだこと、上海のロマンティックな夜景の美しさ……。全てが新鮮で楽しかった。

大学4年生の時には近畿青年洋上大学という国際交流事業に参加した。船で中国を訪れ、日本と中国の大学生が交流し、将来の日中の架け橋を育成しようという事業だった。田舎の村でのホームステイを経験した。水道もない、下水もない村ではあったが、素敵なおもてなしと人情に触れることができた。夜通し片言の中国で話をした。家族のこと、戦争のこと、将来の夢のこと。4年間勉強した中国語は、思うように通じなかったが、ある程度の会話が出来て笑顔が弾けた。晩ご飯の郷土料理は本場の味だ!!と興奮した。朝ご飯で出してくれた山盛りの水餃子も、新婚夫婦のショッキングピンク色の布団も、畑に棒を指しただけのトイレも忘れられない。いろいろな文化の違いはあったが、観光では行くことのない村での交流は、私の人生に彩りを加えてくれた。私は卒業論文で、李香蘭こと山口淑子さんをテーマとして、日中の狭間で生死をさまよった人生を研究した。幸いにも、山口淑子さんとお話しさせていただく機会があり、戦争の悲惨さ、中国の人々の優しさ、平和の尊さを学んだ。中国残留孤児の方々について調べるボランティアにも参加したことがある。色々な方々との出会いが、私と中国とをつなぎ合わせてくれているような気がする。

今は亡き私の祖父は、先の戦争で中国へ行った。敗戦後、中国の人に助けられて、少しの間、心優しい中国人

家庭で、現地の人として生活させてもらったと生前何度も話していた。そして、私の母は、中国の方に助けてもらって無事に帰国した祖父がいたからこそ生まれたのだと嬉しそうに語っていた。学びもしていないのに、中国語がべらべらだった祖父のすすめがきっかけで、私は、大学で中国語を学んだ。そのことを話すと、ホストマザーは、涙を拭きながら聞いてくれた。ホストファミリーの方たちは、ただただ黙って私たちを見守ってくれていた。その後私は、様々な職業を経て高校教師になった。縁あって、中国からの留学生に日本語を教えたり、中国語の教員免許を取得したりした。大学生以来、中国を訪れてはいない。友人が、中国人と結婚したり、中国で仕事をしたりしている近況を聴いたりするだけにとどまっているが、数十年の時を超えて、再び中国を訪れたいと強く思う。お腹を壊したり、トイレの設備が整っていなかったりして、少しばかり大変だったような記憶もあるが、私が学生時代に行った中国は、活気に溢れ、人情味に溢れ、皆がやさしく元気だった。コロナ禍の今だからこそ、あの時交流した全ての方に会いたいと思う。当時の写真を収めたアルバムをそっと開く。20年以上も前のあの日が蘇り、心がほっこりとする。大黒石村の方々、

大連の学生たち、そして、船で交流した友人学生たち。皆で買ったチャイナドレスも大切に保管している。いつかまた、死ぬまでに訪れたい場所、中国。書道をしていた私にとって、中国で買った筆も墨も私の宝物。旅行が自由に出来ない今だからこそ、心の絆で繋がってみたいと強く思う。出逢った全ての中国の方に感謝の気持ちを込めてありがとうを伝えたい。

最近になって、長い間本棚に仕舞い込んだままの中国語会話集を取り出してみた。随分と中国語から離れていたもので、時間がかかるかもしれないけれど、また少しずつ勉強しておきたいと思う。いつかまた、かつての友人たちと再会した日のために。パラパラとページをめくると、祖父の声が聴こえ、中国で出会った全ての方々の笑顔が見えるような気がした。

喜多 住香 (きた すみか)

奈良県立高校・外国語大学卒業後、MC(司会)業、中学校講師、小学校教諭を経て高校教諭となる。大学生時代に、奈良県より夢先隊商(ゆめさきキャラバン)として、シリアアラブ共和国へ派遣される。近畿青年洋上大学に参加し、中国人青年との交流や、ホームステイを体験。内閣府派遣事業により韓国へ派遣。事後活動にも参加し、国際交流や協力ボランティア等に深く関わる。

「私の中国物語」その②

違いもあるけど、それでいい

団体職員 丸山 由生奈

2019年10月28日、ちょうど前日に23歳になったばかりの日に私は生まれて初めて中国に旅立った。内閣府青年国際交流事業の中国派遣団、日本代表青年の一員として、2週間かけて北京、河南省鄭州市、浙江省杭州市の三都市を訪れた。

私は日本の古典文学を専攻する大学院生で、平安文学に影響を与えた中国の文学に興味を持っていた。また、友達には中国からの留学生も多くいる。だが私は中国が本当はどういうところなのかよく知らないというのが本音だった。

日本のニュース等を見ていると、ネガティブな情報も入ってくる。だが、自分の目で本当の中国を見に行き、中国文化や中国人のことを知りたいというのが派遣に参

加した理由の一つだった。

結果としてこの中国訪問は、私がそれまで持っていたイメージががらりと変わる経験となった。特に最後に訪れた杭州市での出来事が印象に残っている。

訪問中、自由時間に買い物に出かけることがあった。その日、私は地元の人が利用するスーパーに行った。レジに並んでいる時に、すぐ後ろに並んだおばあさんに話しかけられた。私自身は中国語をほとんど話すことができなかったが、一緒にいた団員が通訳してくれた。

「『どうして若いのにここに並んでいるの?』って言うてるよ」

中国ではキャッシュレス決済が浸透し、ほとんど現金無しで生活できる「キャッシュレス社会」となっている。

だが、訪問当時、私たちは中国のキャッシュレス決済手段を使っていなかったため、現金専用レジに並んでいたのだ。確かに北京語言大学で行った意見交換の休み時間にタピオカドリンクを飲んだ時も、現地の学生は注文から支払いまでを全てスマートフォン一つで行っていた。スーパーにもキャッシュレス専用の無人レジがたくさんある。若者はキャッシュレス決済を使うものというイメージがあるのだろう。

おばあさんに日本から来ているのだということを伝えると、「めずらしくかわいい人達が並んでいるから話しかけちゃったよ」というようなことを言ってくれた。

スーパーから帰る道で、私は少し寂しい気持ちになった。電子機器を使うのが苦手であるというような理由で、キャッシュレス決済を使うハードルが高い人もいるのだと思う。でも「キャッシュレス決済に慣れていないお年寄りには、時代に置いていかれていってしまうのだろうか」とか、「他の人は今キャッシュレス決済を使っている人に対し、早く使えばいいのにと思っているのではないか」といったことを考えた。

さてこの翌日、浙江工業大学の学生とキャッシュレス決済について意見交換する機会があった。話が進んでいく中で私は、単刀直入にキャッシュレス決済を使っている人、特にお年寄りについてどう思うかと尋ねた。ある学生が答えてくれた。「私たちは便利だから『使う』という選択をしているけれど、必要じゃないとか難しいから使わないとか思う人がいたら、それはその人の選択だと思う。私たちはそれをいけないことであるとは思わないよ」。私にとって、とても意外な回答だった。

ちなみにこれは日本と中国の違いについても同じだった。日本ではなかなか中国のようにキャッシュレス決済を浸透させるのが難しいという話をすると、「中国は結果的に今のような社会になったけれど、日本はスマートフォンを使った方法よりもクレジットカードの方が普及しているとか、これまでの経歴や環境が違う。日本には日本のやり方があると思う」という意見が出た。中国とは違う日本の現状も認めているという点で、ほっとしたような嬉しい気持ちになった。

私は中国に来る前、なんとなく中国の人が自己中心的で、意見を押し通すというようなネガティブなイメージを持っていた。日本に来た中国人観光客が、その場所のマナーより自分たちの主張をする様子を見たことがあったからだろう。

だがその性格は必ずしも悪いものではなく、自分の意

見をしっかり持っており、さらに相手が違う意見を持っている可能性をも理解しているということなのだと考えが変わった。理解した上で、必要な時には自分の意見を主張するのである。

滞在中、中国の人達からよく「中国に来てどう思う?」と聞かれた。私が初めての中国だと言っていたのもあったのだろう。そんな時には私は「正直、来る前は不安もあった」と答えた。「でも、あなたたちと出会ったから、とてもいいイメージが変わったよ」と言うと、みんなにっこり笑ってくれた。

私は実際に中国の人々と交流したからこそ、初めての中国滞在を充実した経験にすることができたのだと思う。もっと私がまだ知らない本当の中国を知りたいと思い、最近中国語学習も始めたところである。社会状況によって、オンラインツールを利用した交流等、多様な交流の形が生まれているが、これからも中国に関心を持ち、特に人的交流に積極的に関わっていきたい。

丸山 由生奈 (まるやま ゆうな)

2019年、早稲田大学文学部日本語日文学コース卒業後、2021年、同大学院文学研究科修士課程を修了。

幼少期から文芸創作活動を続け、2017年に第14回「タリーズピクチャーブックアワード」受賞作、『おるすばんてんし』を出版。修士課程在学中に、2019年度内閣府国際交流事業中国派遣団の日本代表青年として中国を訪問した。今後は学生時代の留学生との交流や、訪中経験を生かした作品創作を目標としている。



出会った人たちと中国の食を通じて文化交流

「私の中国物語」その③

顔見せぬ恩人

大学教員 田中 信子

2020年12月17日夜、強烈な疲労感と、白尽くめの人々への恐怖を抱えて、私は南京の空港に降り立った。

せっかく手に入れた上海空港行きのチケット。しかし、スマホ操作が苦手な私は、中国政府が求めるQRコードを取得できず、飛行機に乗れなかったのだ。20万円以上のチケット、4万円近いPCR検査、そして何より私の帰りを心待ちにしてくれている勤務先の楊先生に、「飛行機に乗れませんでした」と報告するのが辛かった。

運よく3日後の南京行きのチケットを購入することができた。しかし、関西空港で別のQRコードが必要と発覚。中国人地上職員の方が手際よく操作してくれたおかげで、何とか飛行機に乗ることができたが、「どうして私はこんなにダメなんだ……」と、自己嫌悪に襲われた。

機内には疲れに追い打ちをかける光景が広がっていた。足の先から爪先まで、髪の毛さえ見せない白い防護服、物々しい立体マスク、目にはゴーグル、そんな集団で溢れていたのだ。「新型コロナウイルスを祖国へ持ち込まないために、あんな格好をしているのだろうか？ それとも、機内で感染しないための格好なのだろうか？ だとしたら、普通のマスクしかしていない私は大丈夫なのだろうか？」不安だけしかなかった。

中国で日本語教師として働き始めて5年、何度も日本と中国を行き来した。飛行機の中はいつも「ちょっと静かにしてよ！」と思うほど賑やかにお国訛りの言葉が飛び交っていた。しかし、この夜は違った。誰も喋らず、ただ重い空気が漂うだけだった。

着陸したらスマホの電源を入れ家族に連絡する、我先に外に出る、それが中国人だ。しかし、この夜は誰もそうはしなかった。全身白尽くめで男性とも女性とも分からない人が席から立ち上がり、何かを言った。乗客は指示に従っているようだったが、ぶ厚いマスクに遮られて、聞き取りが苦手な私は全く聞き取れなかった。

30分以上経っただろうか、順々に乗客が降り始めた。「これからどうなるのだろうか？」先に中国に入国した人のコメントはTwitterで読んでいた。しかし、殆どホテルに着いてからのこと。PCR検査が行われること以外、空港内のことは知らなかった。



現在の勤務校・寧波工程学院の校内日本語スピーチコンテストにて

建物に入ると白尽くめの人々は増大した。感染防止の観点と、こんな時期に入国するのは中国人だけだという考えからだろう、白尽くめの人々は小声。入国者は一定の間隔を保って歩かされ、重要なことを行う場所はパーテーションで区切られているから、他人を見て次の行動を予測することもできない。区切られたブースに入ったらすぐに、「私は中国人じゃないです、日本人です。ゆっくりと話してください」と中国語で言った。

「綿棒は喉に入れるっていったのに。何で鼻の穴にいきなり突っ込むのよ……」半泣きになりながら歩いていると、すぐ前を歩く男性から「日本の方ですか？」と声をかけられた。「はい」と答えると「お仕事？」と続けた。入国審査の場所に着くと彼は、「先に行って。もし困ったことがあったら私が通訳しますから。安心して」何て優しい言葉なんだろう。数時間とはいえ、重苦しいフライトの直後、彼も疲れていたはずなのに。

その後は流れ作業のようにバスに乗せられ、1時間以上走ってホテルに到着した。バスの扉が開くと「日本人！」と呼ばれ、私はバスから一番に降ろされた。噴霧器から出る消毒液でスーツケースをビシビシにされ、部屋に連れて行かれた。部屋で最初にする作業は、連絡網への登録だった。15人ほどの入国者とホテルスタッフ、医療スタッフが一つのグループを作り、そこに様々な指

示が来る仕組みだった。「空港で『日本人です』と言ったら親切にしてくれる人がいた。ホテルでの14日間、中国語が分からないこともあるだろうから。大目に見てもらえるように日本人って公表しよう」そう思い、本名の後に「日本人」と書き添えた。

スタッフからの指示が終わってしばらくして、「こんにちは。空港で会ったよね？ 指示、理解できてる？」という連絡が来た。続いて別の女性から「私、日本語が分かりますよ。困ったら何でも言って」と。「何でこんなに優しいの？ 疲れて一刻も早く寝たいでしょう？」2人からのメッセージが本当にありがたかった。

隔離当初、連絡網には毎日さまざまな指示が来た。私はそれを読み、「それはこういう意味ですか？」とちくいち中国語で問い返した。スタッフが反応してくれただけではない。2人は毎回「理解できてる！」「全部分かっている！ 心配しないで」と伝えてくれた。「今日は餃

子を食べる日だよ。スタッフにメニューを換えられるか聞いてみるね」「親戚が果物を持って来てくれたの。スタッフさんに言って部屋に届けてもらうね」と、私の食生活にまで気を配ってくれた。

14日間の隔離生活はあっという間に過ぎた。二人は私の不安を取り除いてくれただけではない。大変な時こそ、疲れている時こそ言葉をかける、これが「本当の気遣い」だということを教えてくれた。

田中 信子 (たなか のぶこ)

大学卒業後、TVリサーチャーとしてTBS『王様のブランチ』『はなまるマーケット』などに携わる。退社後、アルバイト先で中国人と知り合い中国語を学び始める。「中国で暮らしてみたい！」という思いが高まり日本語教員として2015年中国遼寧省・渤海大学に赴任。2018年浙江省寧波工程院に転任。「教科書の外にこそ話したいことがある！」をモットーに日本語を教える。趣味は銭湯巡りと和服。東京都にある銭湯約600軒のうち130軒を制覇。

「私の中国物語」その④

「中国」は私の生きる希望

会社員 服部 未来子

「中国」は私にとって生きる希望。私は現在（2021年5月）、駅員の仕事を休職している期間を利用して、中国語教員免許状取得の為に現在通信大学に在籍し日々勉強に励んでいます。

私にとって中国との初めての出会いは2008年秋。当時の私は中学1年生（12歳）でヴァイオリンを習っており、教室の先生に誘われて「面白そう！」という好奇心から10日間の日中交流演奏会へ参加することを決めました。

人生初の海外遠征。パスポートと『地球の歩き方中国編』を手に、緊張を胸に、肩にヴァイオリンを背負い、中国瀋陽市へ向かいました。もちろん中国語も英語も話せないまま……。

移動は大型貸切バスでしたが、一度道路に出たらあちこちでクラクションが鳴りっぱなしという光景。毎朝配られるポケットティッシュはゴワゴワでしかも日本のものとは形状も違いました。現地の学校との交流会でお手洗いをお借りした際は、水洗トイレではなくいわゆるポ

ットントイレ。小籠包が中国南方の上海料理であることもつゆ知らず。「本場の有名料理が食べられる！」と期待していたのに、東北地方だったので出てくるのはいつも饅頭ばかり。

幼い私にとって日本文化との大きな差に圧倒され続けた時間の連続でした。

一方で、この瀋陽滞在は悪いことばかりではありませんでした。

現地の小中学生との交流で私の名前の中国読みが Wèiláizi と発音することを教えてくれたお友達がいたこと。そのお友達が赤い中国風の飾り物をプレゼントしてくれたこと。言葉は通じなくとも、音楽を通して日中文化の相互交流ができたこと。中国の伝統楽器「二胡」が私の視野を広げてくれたこと。当時の良い思い出は13年経っても忘れられません。

しかし日中交流演奏会以降、中国と繋がる機会に恵まれず、2019年に精神的な病を患い、ひたむきに頑張っていた駅員の仕事は休職を余儀なくされました。私は、

長らく休職期間による罪悪感などから自らの存在価値について考え続けていました。病状が落ち着いてきた2020年1月より「中国語を話せるようになって少しでもインバウンドのお客様の力になりたい!」という想いで、独学で中国語の勉強をスタートさせました。

そんな中、転機が訪れたのは2021年3月1日。ポストコロナのこの時代、オンライン上で簡単に国内外問わず気軽に様々な方々と繋がれるようになったことで、私を取り巻く環境は一気に好転し始めました。

中国語独学者が集まるSNSグループで一緒に中国語を学習している友人から強く薦められ、天津外国語大学の1週間オンライン留学プログラムへ参加することを決めました。3月1日から1週間プログラムで、語学研修以外にも、日本と中国の体操文化の違いについての紹介動画(Vlog)を作成、剪紙や習字、映像授業で天津への理解を深め、更に天津外国語大学の学生とオンライン交流会をしたりと内容の濃い体験をしました。私自身の中国語はとても拙いものでしたが、学生との交流会と修了式ではヴァイオリンの演奏を披露し、言語面での不足部分を文化面の交流で補ったことで、修了証と優秀賞をいただくことができました。

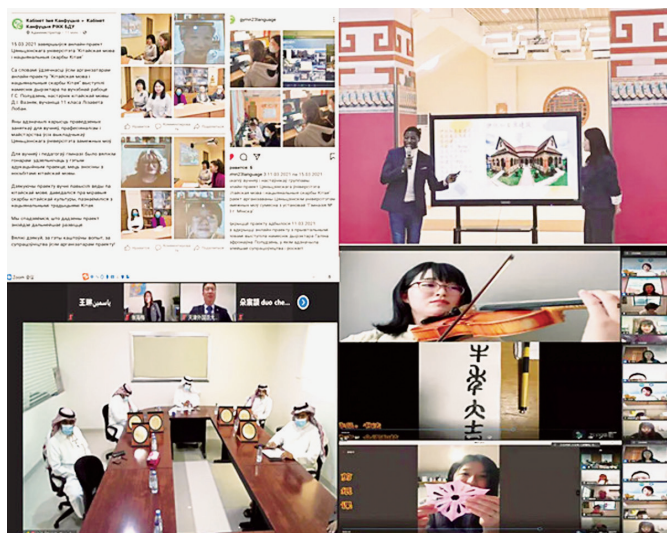
留学プログラム修了後、自然と生活リズムが整い、朝は七時に起きて中国語日記を書いて中国語交流のSNSへ投稿をし、昼間は家事をしながら勉強をし、夜は週3回の中国語レッスンを受け、24時には就寝する規則正しく充実した療養生活を過ごせています。これらは思いがけない副産物でした。

そのような数々の理由から、かけがえのない日常を取り戻してくれた「中国」は私にとって生きる希望なのです。この経験を自分の人生に活かし、日本に来て言語の壁にぶち当たって困っている人の手助けをしていきたい。また、これまでの人生経験を踏まえて中国の奥深さにも興味を持つ人を増やしていきたい。そう思った時気づいたのです。

「そうだ……私には大学時代に必死に取得した小学校・中学校社会・高校地理歴史・公民の4種類の教員免許状がある……」と。

現職を休職できる期間はあと一年あまり。今後の人生はこのままでいいのか。駅員の仕事は本当に向いている仕事なのか。今まで一人で悶々と悩んできましたが、ようやく具体的にやってみてみたいことが見えてきました。今の率直な思いを周りに伝えると、大事な人や会社の理解を得ることができました。そして今は、「中学・高校中国語の教員免許状取得」を目標に療養しながら勉強していくという一筋の光を目指し、歩みを進めている最中です。

今後、中国はますます経済的にも文化的にも発展していく大国のうちの一つであると私は考えています。また、日中の人材交流もますます盛んになっていくであろうと予測しています。今後自分自身がどのように中国と関わりを持っていくのかは現段階では定かではありませんが、いつかまた中国に滞在する機会を目標に、オンラインで繋がりを持った人たちとも対面で会って「謝謝!」とお礼を伝えたいと思っています。それがポストコロナの先にあるいちばん身近な私の夢です。



天津外国語大学のオンライン留学でヴァイオリン演奏を行なった

服部 未来子 (はっとり みきこ)

2018年福島大学人間発達文化学類卒業。在学中に小学校・中高社会科の教員免許取得。就職に伴い2018年4月より北海道在住。「中華圏のお客様への応対ができるようになりたい」という思いから、2020年1月より独学で中国語学習を開始。病気休職中の2021年3月に天津外国語大学のオンライン留学体験プログラムに参加。2021年11月現在、駅員として働く傍ら、中国語教員免許状追加取得を目標に佛光大学通信教育課程在学中。